

琉球国王の出自をめぐる歴史伝承——第一尚氏王統の発祥を中心にして——

The legends concerning the King of Ryukyu: especially around the first Shou family

保坂達雄

Tatsuo Hosaka

要旨

琉球に最初の統一王朝を樹立した第一尚氏。尚思紹・尚巴志に始まるこの王統の発祥をめぐるのは、十七世紀の正史『中山世鑑』に始まり現在の口頭伝承に至るまで様々な物語が創り出されている。歴史と伝承が重層的に絡まり合い生成されたこれらの物語を分析すると、血縁的には繋がらない第二尚氏の始祖尚円王の歴史伝承に重ねていることがわかる。伝承の型のみにとどまらず、時に物語の細部までも踏襲している。また第一尚氏の出自は正史では伊平屋とされるが、その後の口頭伝承ではさらに遡って本島島尻地方の王族を先祖として語られる。こうした歴史伝承生成の背景には、滅亡した第一尚氏の王統と王権の正統性を求める末裔たちの強力な意志が働いていたものと考えられる。

キーワード：第一尚氏 鮫川大主 尚思紹 尚巴志 歴史伝承の生成

はじめに

琉球の歴史は十二、三世紀頃のグスク時代にまで遡るが、十四世紀に始まる三山時代から、後の琉球王国に繋がる古琉球の歴史が始まったとされている。北山・中山・南山と鼎立していた三山時代の沖繩島を統一して、ここに琉球王朝を樹立したのが第一尚氏であった。

この第一尚氏王統の発祥と出自をめぐるのは、歴史と伝承が重層的に絡まり合いさまざまな物語を創り出している。それらの物語はそれぞれのような歴史伝承や口頭伝承と重なり合いながら紡ぎ出されてきたのか。琉球王国とその国王の出自を明らかにするために、物語創出の生成過程を解きほぐしてゆくことでしか、歴史の真相は解明できないであろう。

本稿ではこの検証のために、第一尚氏発祥に関わる歴史伝承を博搜して取り上げる。さまざまに伝えられてきたそれぞれの伝承を分

析しながら、それと関わり合う第二尚氏王統発祥の歴史伝承などとも比較しながら生成の過程を探ってゆく。

一 『中山世鑑』から『中山世譜』まで

古琉球の史書には、『中山世鑑』『中山世譜』『球陽』などの正史、また『琉球国由来記』『琉球国旧記』などの地誌がある。第一尚氏発祥に関わる歴史伝承は、これらの史書にどのように記録されているのであろうか。またその後の口頭伝承ではどのように語られているのであろう。尚象賢（羽地朝秀）が編述した琉球最初の正史『中山世鑑』（二六五〇年）にはどのように記録されているのか。『世鑑』は卷三の一卷を第一尚氏王統六代の歴史に充てているが、その冒頭を次のように書き始めている。

永楽二十年壬寅尚巴志御即位

尚巴志ハ、佐鋪按司、思紹ノ嫡子也。洪武五年丙子ニ御誕生。

洪武三十五年壬午、御歳三十一ニシテ、父思紹ニ嗣テ、佐鋪按司トゾ成給。

永楽二十年（一四二二）「尚巴志御即位」とあるように、第一尚氏の初代中山王を尚巴志としている。また父思紹については、尚巴志を「思紹ノ嫡子」とするだけで、それ以上は触れていない。尚巴志をもって第一代中山王とするのが、第一尚氏に関する『世鑑』の歴史認識であったことがわかる。もちろんこの認識が撰者尚象賢一人の認識であったはずもない。『中山世鑑』は第二尚氏王統第十代尚質王（二六四八〜二六六八年在位）の命を受け、古のことに通じる人々

を集めてそれらの論議に基づいて編述されたものであったので、これが第二尚氏王統の王府における歴史認識であったと言える。

ところが、『世鑑』の五十年後に編集された蔡鐸本『中山世譜』（二七〇一年）では、第一尚氏の歴史を叙述する卷三の冒頭は、次のように始められる。

尚思紹王

父母妃降誕、寿不伝。神名、君志真物。世子、尚巴志王。

附記

思紹原是為佐敷按司時、遇分土争雄民極塗炭觀。其子巴志有

治乱之能。（下略）

尚巴志の父思紹を「尚思紹王」として、第一代中山王に据えて立項する。『世鑑』を漢訳・校訂したとされる蔡鐸本『中山世譜』では、なぜ尚巴志の父思紹が第一代の中山王「尚思紹王」として叙述されるようになったのか。正史の記すところによれば、佐敷按司思紹・尚巴志の父子は、中山王武寧を滅ぼして王位を篡奪。拠点を浦添グスクから首里グスクに移した（一四〇六年）。続いて尚巴志が北山・南山を滅ぼして三山を統一したとされている（一四二九年）。ならば何故に思紹が初代中山王として位置づけられるようになったのだらう。これには明の皇帝から「追封」されたことが関係していたらしい。『中山世鑑』卷三には、次のように記されている。

宣德三年戊申、遣内監柴山・副使阮、為琉球国中山王尚巴志。

及父尚思紹、係追封、為中山王尚思紹。且賜之以皮弁冠服等物。

御妃ニモ、冠服綵幣等ノ物ヲ賜。

是ゾ冠船ノ始也。

中山王尚姓モ、亦是ニ始ル。

宣徳三年（一四二八）、尚巴志は明国派遣の冊封使、内監柴山・副使阮の二人から「皮弁冠服等物」を、妃もまた「冠服綵幣等ノ物」を賜ったとある。これは尚巴志が明の宣宗帝より「琉球国中山王」としての承認を受け、冊封体制の一国として安堵を受けたことを示している。このとき永楽十九年（一四二二）に死亡した父思紹に対しても、「追封」により「中山王尚思紹」とされた⁽¹⁾と記されているのである。

右の記事からわかることは、第一尚氏第一代の王は尚巴志から始まるのであるが、蔡鐸本『中山世譜』が「尚思紹王」として記しているのは、明国側からの父への「追封」を踏まえ中山王として叙述したことなのである。『明実録』『明史』での思紹の記載はすべて「思紹」であつて「尚」姓は付いていない⁽¹⁾という。おそらく蔡鐸は参照した『歴代宝案』の記事を踏まえて「尚思紹王」として立項したものであつたらう。池宮正治は「思紹」はもともと思紹だった。思紹には始祖として尚思紹でなければならぬ要素がない⁽²⁾とし、「思紹は、武寧を打倒したほか、もう一つの南山、島尻地方の東四間切を支配していた島添大里を滅ぼしたというのが、実際のところかと思われる」と指摘する⁽²⁾。

ところで、蔡鐸の子蔡温が改訂した蔡温本『中山世譜』（一七二五年）においても、最初の王を「尚思紹王」とする記述は変わらない。

尚思紹王

神号、君志真物

童銘及降誕、不伝。

父母及妃、俱不伝。

世子、尚巴志。其余不伝。

（遺老伝有云。思紹之父。名叫鮫川大主。乃葉壁人。移居于佐敷間切。新里村。場天之地。遂娶大城按司之女。生一男一女。其男思紹也。女叫場天巫。

思紹長成。移居于苗代村。当時之人。称苗代大親。苗代大親。通于佐敷村。美里子之女。而生佐敷小按司。

小按司即巴志也。又曰美里大親。平田大親。其兄弟也。云爾。

然籍湮世遠。虛實難弁。故遵世譜凡例之定規。不敢強記。是誠重倫闕疑之義也。闕疑之義。見于凡例。遺老說伝之条）

この蔡温本でも、蔡鐸本と同様に尚思紹王は「童銘及降誕」、及び「父母及妃」はともに「不伝」とする。そう記したあと、続けて「遺老伝有云」として古老による伝承を割行にして引用する。これまで『世鑑』にも蔡鐸本『世譜』にもまったく取り上げられることのなかった「遺老伝」。これを割行であるにしても引用しているのは、そこに何か理由がありそうである。その内容とはいかなるものか、要点を記すと次のようになる。

- ① 思紹の父は鮫川大主といい、「葉壁」即ち伊平屋の出身だった。
- ② 鮫川大主は、伊平屋から佐敷間切新里村場天の地に移住する。
- ③ そこで大城按司の女と結婚し、思紹と場天巫が生まれる。
- ④ 思紹は長成して苗代村に住み、苗代大親と呼ばれるようになる。
- ⑤ 苗代大親は佐敷村美里子の女に通い、佐敷小按司、即ち尚巴志を生む。

⑥ 美里大親・平田大親は尚巴志の兄弟である。

①〜⑥からわかるように伊平屋に生まれた尚思紹の父鮫川大主は、

沖繩島の北の岬の辺戸を東に廻って南下する長い舟旅の果て、島尻の佐敷間切新里村場天に辿り着く。そこで、隣村の大城按司の娘と結婚して思紹と場天巫の一男一女をなしたという。思紹は長じて苗代村に住み、苗代大親と呼ばれるようになった。やがて美里子の娘と結婚して、生まれたのが尚巴志である。このような内容である。

苗代と美里とは隣り合った集落で、三〇〇メートルぐらいしか離れていない。この「遺老伝」は小峯和明が言うように「口頭伝承とは切り離された別個の何ものかであり、(遺老伝)から実体的なオララルな古老伝承が復元できる」と安易に考えるべきでないことは言うまでもない。⁽³⁾しかしながら、この「遺老伝」を古老伝承を装った創作と切り捨てて無視してしまうことも、またそれ以上にむずかしいのではなからうか。蔡温が紹介した尚思紹の父鮫川大主に関わる伝承はどのような世界で伝承され、どのような経路を経て蔡温たちのもとにもたらされた伝承だったのだろうか。

「籍は湮し世は遠く、虚実弁じ難し」。それゆえ「敢えて強記せず」とまで言い切るのが『世譜』の方針であった。蔡温本『世譜』「凡例十条」においても、遺老説伝は空言や巧言によるため、変じ易く虚実弁じ難いという。かりにこうした遺老説伝を載せてしまうと、先王を冒瀆する結果となる。まして凡人の情においては、公卿の末裔を栄えとし平民の子孫を恥とする。遺説を許してしまうと、人々は栄えを貪り、虚をもつて実と為し、詐りをもつて信と為してしまいうだろうとまで記している。蔡温が「遺老説伝」に向き合う態度とはこのようなものであった。これほど厳しく、真偽のはっきりしないものは除くとしながら、蔡温本ではなぜこの「遺老伝」を載せた

のであろうか。蔡温本『世譜』には、この他にも四例の「遺老伝」が収録されているのである。ただこの「遺老伝」では残念ながらあらすじが記されているだけで、本来古老たちによって語り伝えられていた内容がいかなるものであったか、これだけではわからない。

編者蔡温はもっと詳しい伝承を聞き得ていたとも考えられるが、『世譜』記載に際して必要最小限のあらすじだけに留めたとも推測されるのである。それにしても、『世鑑』・蔡鐸本『世譜』とは異なった伝承をたとえ割行にするにしても書き加えたということは、その伝承を抹殺できないとする何らかの状況なり説話集団なりが存在し、それを無視することができなかったことを明かしているのではあるまいか。この「遺老伝」には尚巴志誕生までの歴史が祖父鮫川大主の代まで遡って語られているのであるが、そのなかで最も重要なことは第一尚氏の出自が伊平屋にまで辿られて語られていることである。

二 「佐銘川大ぬし由来記」

いったい鮫川大主の伝承はどこどのような人々に支えられて語り伝えられてきたのだろうか。またそこにはどのような意図が働いていたのであろう。こうしたことを考える上で、きわめて注目すべき資料が残されている。蔡温本からさらに百数十年経た後のものであるが、「佐銘川大ぬし由来記」と題されたものである。この「佐銘川大ぬし由来記」のうち管見に入ったものは、鎌倉芳太郎筆写になる佐敷村所蔵の同治七年（一八六八）本、「佐敷間切ニある元祖由

来記写」とする光緒十七年（明治二十四）本、同じく発行者を「佐敷間切」とする明治三十三年（一九〇〇）本、書写者・書写年代未詳ながら「佐敷番所ニ於テ写之」とされる琉球大学伊波文庫所蔵本、それに比嘉春潮筆写本の五種である。いずれも近世琉球から近代にかけて書写されたものであるが、伝承年代はどこまで遡ることができかわからない。またこれらは「佐敷間切」「佐敷村」「佐敷番所」で書写したとあるので、鮫川大主が居住したとされる佐敷で語り伝えられてきた在地の伝承と考えるのが自然であろう。現在でも佐敷には鮫川大主を始祖とする門中が数多くあり、奉賛会活動や門中祭祀が続けられている。おそらくそうした一族の末裔たちの間で伝えられてきた伝承である可能性がきわめて高い。

それでは、「佐銘川大ぬし由来記」を同治七年戊申閏四月写し本によつて紹介しよう。⁽⁴⁾

往昔佐銘川大ぬし伊平屋伊是名島の住人佐敷間切江御渡来、大城按司御婿ニ成給ふ由来伝承候得者、幼少の時父母しらすで孤子成玉給ひは、親類縁者の方預り、養育最早十歳余になれ玉ひは、農業ニ心掛、其働仕給ふに作色数不豊と云事なし。（下

略

このように始まる物語であるが、長くなるので内容を要約すると以下のようになる。

①伊是名島の住人佐銘川大主は幼少時孤児であった。十四五歳になり田の耕作をしようと畦を作ると、夜ごと誰かが作ってくれている。ある夜隠れて見ていると、牛が数匹集まって田を踏んでいる。天の助け神の助けと手を合わせて拜んだ。彼の作る米

粟はいつも豊作で、富貴万福となった。親類縁者や近所の人々また不自由している人々にも施したので、大主と呼ばれるようになった。

②ある年大風大旱が続いて、島民は窮迫した。大主は伊平屋島中の老若男女に米粟を一日一合二合と配分して助けた。すると人々は一度に纏めて配ってほしいと願ひ出る。大主は合点がゆかず、この飢饉はいつまで続くかわからないからといって断つた。

③島中の者たちは寄り合いをし、大勢で押し寄せ米粟を奪取してしまおう、もし異議ある者が出たら大主もろとも討ち果たそうと相談して、島民たちは米倉の米粟を奪い取つた。

④そうとは知らず漁に出ていた大主がその日の入相時分に帰つてくると、日頃親しくしていた近所の老人からどこでもいいからすぐにこの島から逃げ去るように指示される。老人の勧めに従い島を出ると神の助けか風が出て、追つ手も振り切つて今帰仁の浜に着くことができた。ある日、浜辺で昼寝をしていると、夢の中に伊平屋島の老人が再び現れ、辺戸の岬を漕ぎ回り南に向かつて下つてゆくと、南を腰当てにして北を向いたところに大瀉がある。そこに居住して大業を起こせと教えられ、佐敷ばてんの浜に着く。

⑤大主はばてん瀉で漁をして暮らしていた。ある日過分に獲れたので魚を担いで稲福大城あたりまで売りに行くと、ちょうどその時、大城按司がいつものように城下の視察に来ていた。魚売りを見つけると呼び寄せられ、どこから来たかと聞かれる。「私はもともと伊平屋島の者でございますが、生活のためにば

てん浜に来て暮らしております。」按司は神妙な面持ちでお聞きになり、「おまえには妻子はいるのか」と尋ねられる。「いえ、妻も子もなく独り身で」と申し上げると、「ならばこれは幸せなこと。我が娘を妻にして賀にならぬか」とおっしゃられた。

大主は驚き、「私は多びす離れ島の賤者でございませうから」と恐縮して立ち去ろうとすると、大城按司は手を取って、「我、冠の高下ハ不嫌」と言つて、昨夜見た夢の中に白髪の翁が現れ、「汝か賀になる人ハ多びすより魚かたげて来るへし是必賀に取へしと夢に見し」と言い、どうしても辞退しないでくれと言つて、みずから手を取つて場内 に引き連れていった。

⑥吉日を選んで祝儀をあげ、ばてんに屋敷を構え富貴万福にして、男子苗代大比屋と女子ばてん大のろが誕生した。

⑦聞得大君大和漂着譚。

⑧苗代大比屋の御事。苗代大比屋は苗代の里に家屋敷を構え住んでいた。この里の近くの美里子の女子にたぐいなき美女がおり、深窓の令嬢として大切に育てられていた。年頃になった頃、大比屋はこの女子を見初めて密通の思いを遂げ、懐胎させてしまふ。驚いた母親は父親にはこのことを隠しておいたが、やがて出産間近になると父親の知るところとなつた。このような出産は世にも恥ずかしいと怒り娘を打ち殺そうとすると、女は家を出て苗代樋川の小山に身を隠し玉のような男子を産むが、こっそり殺してしまおうと思つていた矢先、そこに白髪翁がいずこよりともなく現れ、誰の子かと尋ねた。苗代大比屋との「密子」(隠し子)であると答えると、「この子はただ人ではない。ゆく

ゆくは国主となるほどの果報の生まれである」と言い、翁はおもろを誂いながら母子を連れて苗代大比屋に渡しに行き、何方ともなく消えてしまつた。

⑨苗代大比屋の子はやがて成人して佐敷郡司となり城を構え、佐敷小按司と呼ばれるようになった。世に勝れたる勇士となつて従わぬ人はなかつたという。北山・中山・南山の争いにより民衆の困窮果てしなかつた時、一国にまとめるべく兵を起こして中山王として即位した。その上で唐に冊封の願いを申し出、使いとして平田大比屋の男子手登根大比屋を渡唐させた。唐からは冊封使を勅使として迎え、「尚巴志王」の奉号をいただくことができた。

①～④は伊平屋時代から場天に辿り着くまで、⑤大城按司の婿となるまで、⑥苗代大比屋、女子ばてん大ノロ誕生、⑦聞得大君大和漂着譚、⑧苗代大比屋、美里子の女と密通、玉の男子出産、⑨佐敷小按司から中山王へ、という筋立てである。先に挙げた蔡温本『世譜』の「遺老伝」とは比較できないほど、ストーリーの細部にまで行き届いた、実に詳細で具体的な物語となつている。蔡温が割行にした「遺老伝」の中身は、おそらくこのような内容だったのでないかと思わせるほどである。そうなると「佐銘川大ぬし由来記」の伝承年代も書写年代より遥かに遡つた時代を想定してみなければならなくなる。第一尚氏の王統が途絶えたのは一四六九年であつた。琉球王国はすでに第二尚氏をもって正統とされる時代となつている。そうした時代にあつて、第一尚氏発祥に関わる伝承が語り継がれる意味とはいつたい何だったのか。またその伝承はどのような人々に

よつて伝えられ受け継がれてきたのだろうか。

このことを考えるために、「佐銘川大ぬし由来記」の物語を、①から⑨までのあらずじに沿って検証してみよう。まず①から④までの伊平屋での迫害から本島へ遁れるくだりは、『中山世鑑』巻四に記されるように第二尚氏の始祖尚円王の伝説と同じストーリーになっている。

成化六年庚寅尚円御即位

尚円公ハ、北夷伊平也嶋、伊是名、首見ノ人也。永楽十三年乙未ニ御誕生。字ハ思徳金トゾ申ケル。

父母ハ素ヨリ、嶋ノ百姓タリ。其先ハ、今ニ不可知ト云ヘドモ、

疑クハ先王ノ後胤ニシテ、故有テ彼地ニ渡リ、世々嶋ノ百姓ト

ハ成リヌラン。不然即如何ゾ、俄ニ此大福有ニヤ。

佐銘川大王が伊是名島の出身であるように、金丸もまた伊是名島諸見の百姓の家に生まれている。また二人とも農耕に神の助けがあったことも共通する。佐銘川の田では牛が深夜に田起こしなどを手伝い、金丸の田には早魃の際にも水が満ちていたという。そのため、二人とも迫害を受けその難を逃れるために島を離れる。しかも、白髮翁の指示で危険を知って島外に脱出するくだりも、これまた『世鑑』や『琉球国由来記』の叙述と類似し、ほとんど金丸の伝説を襲用しているといえる。

尚円公ハ、少ノ時ヨリ、百姓ニ交リ、耕農ヲ業トシ給。或時、

早魃ノ災有テ、田ニ水アルハ無シ。人ハ皆、夜白、水ノツトメ

ヲシケレドモ、惟尚円公ハ、其ツトメナシ。サレ共、田ニ水ア

ル事、宛モ雨天ニ不異。人皆聖瑞ヲバ不知シテ、尚円公、水ヲ

ヌスミ給トゾ、申ケル。

尚円公、大ニ驚キ、嶋ノ長ニ、訟給ケレドモ、嶋ノ長モ、共ニ、貪欲ノ小人ニテ、有ケレバ、更ニ聞立ル者ゾ、無リケリ。

去程ニ、尚円公、腹ヲスエカネ、我不幸ニシテ、海辺ノ小嶋ニ生テ、カ、ル汚俗ニ交リ、蠅蟻ニ制セラレンモ、口惜カルベシ。吾聞、大鵬トカヤハ、一羽ニ万里ヲ飛トカヤ。我モ、ナジカハ、カレニハ、ヲトルベシトテ、妻子ヲ相具シ、扁舟ニ棹シテ、尚巴志ノ御時、正統三年戊午、行年二十四ニシテ、始テ国頭ニゾ渡リ給。〔中山世鑑〕巻四〕

67 玉城ヒヤ 「俗ニオヤ田ト云也」

金丸王加那志ミヲヤ地。今、代々アムガナシ地方ニ被下置。由緒ハ、金丸王御作毛、年毎ニ純熟シテ他ノ作物ニ異也。或時一年大旱ノ時、下ノ民田ハ水干テ、上ノ御田ハ水減ゼズ。下ノ田主、水ヲヨコシ入レ置ケルニ、一夜ノウチニ上ノ御田ニ上リ加里、下ノ民田水乾ケレバ、田主、御田水満テ不絶事ヲ怪ミテ、嘸、水ヲ汲上ラレタルト心得テ、野心ヲ企奉殺害ラント巧ミケルヲ、夢ニモ知ラセタマハズ、田ヲ耕シ晩ニ御帰リメサレケル時、誰共不知白髮翁、御門ノ辺ニイ、申ケルハ、御主コソ此地ニ御棲居ハ危キ御事也。早ヤ国頭ノ地方ニ御渡リアレト、急ヲ奉告ケレバ、即御渡海ノ思召立ニテ、其御用意アリシヲ、翁申ニ、御糧御用意も入間敷也。一刻も御急ギアレト、浜表へ奉催、クリ舟ニ船具備へ置、青茅ニテ赤飯ノベント三、白米一俵乗置、是御用ひ可有ト、翁ハ則失タマフ。寔神託ナリト、示現ニマカ

セテ、国頭郡宜名真ト云所ニ御着船有テ、竊ノ御棲居ニ年月ヲ御送アリケルニ、何事モ御思ノ儘ニ相叶故、且、里人奉憎、害ヲ企ケル処、泊大比屋「馬氏国頭親方後胤」密ニ奉告知故、其難ヲ御遁レンガタメ首里ヘ御幸有リタルト、古老者申伝也。

月次ニ、御ゲライ御米一石五斗宛献上アリ。是ハ、尚円王御踐祚以後ノ佳例ナル歟。 『琉球国由来記』卷十六

右掲の『琉球国由来記』では、金丸の田にだけ水のあるのを妬んだ他の農民が金丸殺害を計画する。これを察知した金丸は、白髪の翁が用意してくれた刳り船で国頭宜名真に脱出するのである。このような『琉球国由来記』の金丸伝承と佐銘川大主の伝承は、主人公の名前を入れ替えても不思議に感じないほど限りなく似通った伝承となっている。

このように口頭伝承の世界では、物語の型を踏襲するだけでなく、細部までも真似て近似した物語を紡ぎ出してゆくことがしばしば起こりやすい。佐銘川大主伝承と金丸伝承のどちらが先かはもちろん議論の余地はある。だが、金丸伝承が『世鑑』の方に先に記載されていることを踏まえると、歴史事実の時間としては佐銘川伝承の方が先行していたとしても、佐銘川大主が伊是名島から沖繩島に逃れてきたとする伝承は金丸伝承よりも後の物語と考える方が自然であろう。第二尚氏王統の時代の中で佐銘川大主の伝承が語られてゆかたためには、オーソリティーをもっていた第二尚氏の始祖たる尚円王金丸の伝承を前提にしなければ語りとして成り立ちえなかった、ということがあったのではなからうか。

さて次の⑤であるが、佐銘川大主が大城按司の智となる経緯の語

りは、夢の論しや偶然性などをモチーフにした神話的なものであるが、その語り方は小説的とも言えるほど具体的である。ここには語りの現場を彷彿とさせるリアリティーさえ感じられる。「佐銘川大ぬし由来記」として文字化される以前の口承段階で生き生きと語られ、物語として成長している姿が見えている。⑥は蔡温本『世譜』の筋立てと同じ。また⑦は、引用は省略するが『琉球国由来記』卷十三—60（友盛ノ嶽御イベ）と表現に相違する箇所は見られるが、内容はまったく同じである。

⑧は苗代大比屋、即ち佐銘川大主の子である尚思紹の密通譚である。深窓の令嬢のもとに通ってくる男、密通という許されぬ結婚、娘は家を出て苗代樋川を彷徨い、小山で隠れて一人で生むという出産形態。いずれも神婚譚の型を踏まえている語りである。即ち、通ってきた苗代大比屋は神とも見紛う存在であり、生まれてきた「玉の男子」も神の子に他ならなかった。それゆえに、白髪翁を登場させて「国主なる果報の生」と言わしめているのである。こうした点から考えると、尚巴志誕生を語るこの密通譚こそ第一尚氏初代の王尚巴志を聖なる子として誕生させるための説話的装置であり、神婚譚を踏まえて生成された神話だったといえるのである。

⑤の箇所もそうであったが、佐銘川大主伝承にはこのように神話的な伝承モチーフが潜んでいる。その意味で古層の伝承を色濃く残しているといえる。ところが、金丸伝承の方にはこうした神婚譚に基づくストーリー展開が見られない。両伝承のこの相違は注目すべきことで、何を意味しているのだろう。すでに見てきたように、佐銘川大主伝承は物語の型から伝承の細部に至るまで金丸伝承を踏

まえている。にもかかわらず佐銘川伝承の方がより神話的であると
は、いったいいかなる伝承生成の力学が作動したのであろうか。

鮫川大主についてはじめて史書に記されたのは、蔡温本『世譜』
のなかに割行として引用された「遺老伝」で、一七二五年のことであ
つた。この鮫川大主が主人公の伝承として記録された最も古いのは、
一八六八年の「佐銘川大ぬし由来記」である。この間の百年以上
の歳月のなかで何があつたのであろうか。物語の型としては尚円
王金丸の正統な歴史伝承を踏襲しながら、伝承生成の過程では金丸
伝承を超えて一層神話的な要素を加えている。佐銘川大主の結婚の
経緯から尚巴志誕生の物語はより聖性を帯びて神話的に展開されて
いるのである。ここにはあらたな歴史伝承を伝統として創造しよう
とする生成の力が働いているように思われる。正統なる第二尚氏の
遙か向こうに、第一尚氏の歴史を古層の物語として神話的に語るう
としてゐる。おそらく第一尚氏の末裔たちが、消え去つた王統の伝
統をみずから創り上げようと神話的に語り出し伝えようとしてい
たのではなからうか。

三 「サメ川ウフヌシ伝説」と屋蔵大主伝説

ここまで第一尚氏の出自伝承について「佐銘川大ぬし由来記」を
もとに検証してきたが、この資料が佐敷村で書写された在地の伝承
であるのに対し、同じ在地の伝承と思われるものに、「鎌倉芳太郎
ノート」に記された「サメ川ウフヌシ伝説」がある。「伊是名村ニ
テ聴取」とあるように、これまた佐銘川大主の出身地、伊是名島で

の伝承である。鎌倉がこの伝説をいつ聴取したのか、その日時は不
明であるが、鎌倉の年譜から判断して大正十三年から昭和二年の頃
のことと推定される。⁽⁵⁾

まず「鎌倉芳太郎ノート」の関連箇所を原文のまま引用する。

○サメ川ウフヌシ伝説（伊是名村ニテ聴取）

1. サメ川ウフヌシノ元祖ハ田名ニ信ミタリ。
2. 田名ヨリ我喜屋ニ来リテ次第二富ヲナシハ倉ヲ立テ、盛
大トナレリ。

3. コノ時伊是名島ハ八倉ノ次男ヲ毎年交替テ遣シ統治シタリ。
サメカワウフヌシハ八倉ヨリ遣ハサレテ伊是名島ニ至リ
タリシガ一年ニテハ帰ラズコヽニ止マリ且今婦仁及首里ト
交通シテ次第二富ミ盛へ後ジラ凌グニ至レリ。

4. 八倉ヨリハサメカワヲ滅サント計リ首見ノ民ヲセン動シ
テ大早ノ時ニ米一合ヅヽヨリ以上与へザルヲ怒ラシメ遂ニ
殺サント思フニ至ラシメタリ。

5. 老翁ノ告ニヨリ食糧ヲ貰ヒテ伊平屋ヲ出デ今婦仁逃レタ
リ。

6. コヽニテ毎日舟ニノリ魚ヲ釣リテ住ミタリシガ常ニ従僕
一人ヲツレテ沖ニ出デ足ノオヤ指ニ糸ヲマキツケ昼寝シツ
ヽ釣リタリシニ或日大フカ出デテサメ川ノ足ヲ食ントセリ
従僕驚キテサメカワノ常ニ帯セル刀ヲフリ上ゲシニ大フカ
ハ又海ニ入ルカクスルコト数度ニ及ビシカバ従僕ハコノ刀
ハ威力アルヲ思ヒ遂ニサメ川ヲ殺シテコレヲ奪ハント思ヒ
居タリ或時コレヲ他人ノ人ヨリサメ川キヽ又コノ難ヲ逃レ

テ奥間ニ行キタリ。

7. 更二国頭辺戸ニ渡リタリシガ又徳高キニヨリ難ヲウケ海岸ヲ巡リテ勝連半島ヲ過ぎ佐敷ニ行キタリ。

8. 佐敷按司ノ智トナレリ又一説ニ座喜味按司ノムコトナレリト云フ。

異説

1. 今帰仁城滅亡ノ時ニ木箱三ツニ子供ヲ入レテ沖ニ流シタルニ伊江島ニ到着シ更ニコレヨリ伊是名島ニ来レリコノ子供生長シテサメ川ウフヌシトナレリ。

2. 今帰城ヨリ箱ニ入レテ流シタルニ直チニ伊是名島ニ到着シコレヨリサメ川ウフヌシ成長シタリトナスアリ。

右の内容は、以下のように纏められる。

① 鮫川大主の元祖は伊平屋島田名に住んでいた。

② のちに我喜屋に移り、豊かになって八倉を建てた。この時伊是名島には屋号「八倉」の次男を毎年交替して派遣し統治していた。

③ 八倉の次男であった鮫川大主は伊是名島の統治を任されたが、一年では帰らずここに止まり、今帰仁や首里と交易して伊平屋島を凌ぐほど豊かになった。

④ これを妬んだ八倉は鮫川殺害を計画。大旱のとき米一合しか施さない大主を殺すよう、首見の農民たちを煽動した。

⑤ 殺害計画を老翁より知らされた大主は、島を脱出して今帰仁に逃れる。

⑥ 鮫川はここで従僕一人を連れていつも海に出て釣りをしていた。

足の親指に糸を巻き付けて昼寝をしながら釣りをしていると、大フカに足を喰われそうになる。従僕は大主が帯刀していた刀を振り上げて、フカを撃退させた。この刀の威力を知った従僕は鮫川を殺してこの刀を奪おうと思っていた。そのことを他の人から聞いた鮫川は、難を逃れて奥間に行った。

⑦ そこからさらに国頭辺戸に移ったが、それでも徳高きにより難を受け、また海岸を廻って勝連半島を過ぎ佐敷に辿り着いた。

⑧ そこで佐敷按司の智となった。また一説には座喜味按司の智となったと言われている。

⑨ 異説——今帰仁城（北山）滅亡のとき木箱に入れて流され、伊江島に漂着のち伊是名島に流れ着いた。この子どもが成長して鮫川大主になった。

今帰仁から箱に入れて流され、直接伊是名島に漂着した。その子が鮫川大主である。

この①から⑨を、これまでの佐銘川大主伝承と比較しつつ重なるところと重ならないところを整理してみよう。まず①から③について。佐銘川大主の先祖は伊平屋島の田名に住み、我喜屋に移ったとする。この先祖は豊かになり倉をたくさん建てたので「八倉」と呼ばれるほどになったとあるように、非常に具体的である。また佐銘川はこの八倉の次男とされ伊是名島を任されて、伊平屋島我喜屋の本家を凌ぐほどに隆盛したともある。ここまでは、これまでの佐銘川伝承にはまったく語られていない新情報であった。

次の④は「佐銘川大ぬし由来記」と重複する内容であるが、本家八倉の煽動とする点が新しい。これは佐銘川大主を八倉の次男とし

のために、本家と分家の対立の視点が加わったのであろうか。⑥のフカを撃退させるエピソードもこれまでになかったものであるが、実は佐銘川大主の孫に当たる尚巴志の伝記の語り方と同じものであった。蔡温本『世譜』尚巴志王の「附記」には、

巴志得此劍。一日駕舟遊。忽然大鰐。翻浪躍來。舟幾覆沉。巴志按劍而立。鰐魚畏退。不敢侵。
(蔡温本『中山世譜』卷四)

とある。フカと「大鰐」の違いはあるが同趣のエピソードといえる。おそらく尚巴志のこの伝承を取り込んで語ったものであろう。

一方重なっているところといえば、老翁に教えられて今帰仁に逃れるくだりである。このくだりは基本的には尚円王金丸の伝承をベースにしたものであり、早魃でも佐銘川の田だけ水が枯れなかったとするのは、すでに引用したように、「或時、干魃ノ災有テ、田ニ水アルハ無シ。人ハ皆、夜白、水ノツトメヲシケレドモ、惟尚円公ハ、其ツトメナシ。サレ共、田ニ水アル事、宛モ雨天ニ不異。人皆聖瑞ヲバ不知シテ、尚円公、水ヲヌスミ給トゾ、申ケル。」(『中山世鑑』卷四)とあるように、尚円王の伝説と一致している。しかも尚円王金丸の伝承との重複はこればかりでなく、刀を従僕に奪われそうになった大主が逃げていった先の奥間は、宜名真からさらに逃げて東鍛冶屋に助けられた金丸伝承と一致する。また佐銘川が木箱に入られて流され伊平屋島に漂着したとする異説は、次に紹介するように尚円王金丸の伝承ともまったく一致するものだったのである。

昔頭門貴族首里より隠遁して国頭間切辺戸村に下り土豪佐久真方に寄寓し、後回家の愛娘との間に、男子を挙げ、此に於て村民の協議により其子を箱に封じて海に投ず。伊平屋島の漁夫或

日海浜に在りて洋中を望むに何物か波の間に漂ひ来るを認む。取りて検すれば玉の如き男子箱の中に在り。(下略)

昔球陽諸郡戦乱時代尚円の父討死せしに依り一子(金丸)を箱に入れて海中に投ぜり。箱は漂流して伊平屋島に至り漁夫の発見する所となる。⁽⁸⁾

ともに大正八年刊の『沖繩縣国頭郡志』所載のものであるが、前者は国頭村奥間、後者は久志村汀間採集と記されている。このように小箱に入れられて流されながらも、漂着して助けられ後に成長して国王のような地位に就くという伝承は、神話にしばしば見られるもので、「うつぼ舟」漂着型などと呼ばれている。この話型は異界から寄り来る神の子であるという尋常ならざる誕生を語る説話的装置である。第二尚氏の始祖を語るためにはそのような説話的装置が必要不可欠だったといえる。それと同じように第一尚氏の始祖たる佐銘川大主を語るためにも、このような神話的な語りが求められたのであつたらう。

このうち鮫川大主伝承はどのような変遷を辿って語られていったのであろうか。一九八一年発行の『伊平屋村史』には、鮫川の父、屋蔵大主の伝説が次のように載せられている。

屋蔵大主は、天孫子の子孫で、第二回目の琉球国王英祖王の五男、島尻世主大里按司の三男、上与座按司の次男である。英祖王の四代目の玉城王時代になって、玉城王は、酒色に耽り、朝観の礼を行わず、これによって諸按司朝せず、政務懈怠して、国政大いに衰え、國中乱れて、中山、北山、南山が鼎立して、

対立するに至った。

ここにおいて、上与座按司は、兄南山の大里按司に対して中山の玉城王の反省をうながすよう、兄大里按司に進言した。ところが兄の大里按司はその忠告に怒って、そのため上与座按司は、兄大里按司に殺害された。ここで上与座按司の次男屋蔵大主は、当時の本島地方の諸按司の行動に、不満を起したのか、伊平屋島我喜屋の上里部落時代に、我喜屋部落に渡来し、その後相当の耕地を獲得して、勢力を涵養して、上里の敷地に八ツの高倉を建造して穀物を貯蔵しその敷地を屋蔵敷地と唱えた。本村では屋蔵敷地を屋蔵大主の屋敷であったとの伝えと、八ツの高倉敷地でもあったとの伝えが残っている。

屋蔵大主は、二男三女を産み、長男は鮫川大主、次男は上里按司、長女は我喜屋親祝女、次女は我喜屋祝女に就任させた。

屋蔵大主は、ますます権力を増強して伊是名城跡に城を築き鮫川大主を城主として、伊是名地方を統治せしめ、また我喜屋にも城を築いて、伊平屋地方を統治されたとのことであるが、

伊平屋地方での築城場所は、現在不明である。(下略)

屋蔵大主が鮫川大主の父親であったことは、すでに「鎌倉芳太郎ノート」にも記されていたが、ここではさらにその先の曾祖父の出自にまで遡って語られている。屋蔵大主の父は島尻大里按司の三男、上与座按司だといふのである。上与座按司は玉城王(一二四〜一三三六年在位)の政治に絡んで、兄大里按司に殺害される。その上与座按司の次男であった屋蔵大主は、按司たちの行動に不満を抱いたのか、沖縄島島尻の地を離れ伊平屋島に渡ったという、一種の貴

種流離のかたちをとっている。以上を系図にして示すと、次のようになる。

英祖王—大里按司—大里按司

上与座按司—屋蔵大主—鮫川大主—尚思紹—尚巴志

上里按司

このように鮫川大主の出自を英祖王の五男にまで遡らせる歴史認識はどこから生まれてきたもののだろうか。さらに言えば、鮫川が伊是名城主となって伊是名地方を統治したという点で先の「鎌倉芳太郎ノート」と同じ伝えを伝えながら、次男と長男との違いがある⁽¹⁰⁾のである。こうした伝承の微妙な相違はどこから来ているのであろう。

ところで、この系図でもっとも注目しなければならないのは、鮫川大主の曾祖父が沖縄島島尻地方の大里按司だったということなのである。大里間切は東四間切の一つで、鮫川大主が辿り着いた佐敷間切の西に隣接する間切である。その大里から伊平屋に渡った屋蔵大主の子の鮫川大主は、『伊平屋村史』の屋蔵大主伝説と結び付けるとすれば、再び父祖の地に戻ってきたということになる。本島から離島の伊平屋島や伊是名島に渡り、そこから再び本島に戻ってくるというこのストーリーは、貴種流離した一族の末裔が何度も危機に遭いながら、生き延びて父祖の地に戻り王となるというストーリーである。第二尚氏の高祖尚円王も伊是名島の百姓の子として生まれたとされながら、「疑クハ先王ノ後胤ニシテ、故有テ彼地ニ渡リ、世々嶋ノ百姓トハ成リヌラン」と『世鑑』では語られている。鮫川大主伝承も同じように歴史を遡らせ父祖の地に辿り着くことによつ

て、後にその子尚思紹、そして孫の尚巴志が佐敷の按司となり、そのうち中山王となるという必然性をより強調したかったのではないだろうか。さらに言えば、尚思紹から始まる第一尚氏王統は英祖王統の英祖王（一二六〇～一二九九年）にまで遡ることになってしまふのである。英祖王といえ、母親が日輪の懷中に飛び込む夢を見て身ごもつて誕生した神話で有名な王である。⁽¹⁾浦添の伊祖グスクを居城とした英祖王にまで辿り着く王統の物語を創り上げようとする作用はいったどこから生まれてきたのだろうか。しかも、一旦本島を離れ北の伊平屋・伊是名の島を巡ってくる伝承なのである。

四 鮫川大主伝承の生成過程

第一尚氏発祥に関わる歴史伝承を古琉球の史書から現代にまで受け継がれてきた口頭伝承を取り上げて考察してきた。そこで問題となってきたのは、次のような点である。

まず第一に、第一尚氏と第二尚氏は血縁的には別系統でありながら、伝承の上では第二尚氏の始祖尚円王金丸の伝承と重複している。いずれも伊是名島に住みながら、百姓たちからの迫害を受けて脱出する。その迫害の理由や経緯まで類似して語られている。そうしてさまざまな難を逃れながら沖繩島の各地を廻って、最後に王権の誕生地に辿り着くというストーリーである。しかも宜名真・奥間など、難を逃れながら辿り着く巡行地まで一致する。物語の型のみならず、地名など伝承の細部に至るまで類似して語られているのである。第一尚氏と第二尚氏は本来別系統であるにもかかわらず、なぜこのよ

うな類似性をもつのか。鮫川大主に始まる第一尚氏の歴史伝承は、『世鑑』以後第二尚氏の王統の時代のなかで記録され伝えられてきたものである。このことは何を意味するのか。血縁的な連続性が無い第二尚氏の側が、第一尚氏の出自伝承を真似し繋げてゆこうとする作用が働いたとは到底考えられない。むしろ逆に第一尚氏の末裔たちの論理が作用したのではないだろうか。即ち、第一尚氏の歴史を語り継ぐ上では、正統とされている現在の王統の歴史伝承のストーリーに重ねて語ってゆくことが、結果的に第一尚氏の歴史を第二尚氏に繋げてゆくことになったのではないか。そうすることが、すでに滅んでしまった第一尚氏の事蹟を歴史のなかに刻み込み伝えてゆくことになったのではなからうか。

第一尚氏王統も第二尚氏王統もその出自がともに沖繩島北方の伊平屋であったということについて、これまで伊平屋は神の来る方角という信仰の視点のみで説明されてきた。折口信夫は「琉球国王の出自——佐敷尚氏・伊平屋尚氏の関係の推測——」と題した有名な論文のなかで、「伊平屋は、神の来る方向に当る島であったこと。その為、沖繩島の王統は、常に一度ここを経由して来たものとの信仰があり、それが史的現実化した」とし、「ある時代において、沖繩を支配するものは、神が来り臨む方角と同じく、伊平屋から来る、とする信仰があつた」と論じている。⁽¹²⁾国王を「まれびと」として海の彼方からやってくるとするまれびと論の延長線上に展開された論説であろう。小島瓊禮も、「歴史ではなくて、信仰としかいいようのない出来事である」として次のように述べている。

二度の尚氏、尚巴志王統と尚円王王統がともに伊平屋島（間切）

に起こっているというのも、実に不思議な歴史である。それも伊平屋島に強大な勢力があつて、そのつど王位を篡奪したというのならわかるが、伝えによれば、一人の村人が、あるいはその子孫が、個人の力でしだいに国王の位にまで上るといふのである。歴史ではなくて、信仰としかいいようのない出来事である。⁽¹³⁾

さらに最近の研究では、島村幸一が「サメガ」(鮫川大主)が、「葉壁人」だとするのはどこからきたのか。これは、第二尚氏の開祖とされる円(金丸)が「北夷伊平也嶋伊是那首見ノ人也」(『世鑑』)とする記述に、第一尚氏の出自を重ねたということではないか」とし、「神や貴人が沖繩に渡来する際は北方からやってくる、あるいは沖繩本島の北に位置する伊平屋を経由地としてやってくるという信仰がベースにあるからではないか」と言う。また「典籍」にはつきり記されていても証拠が足りなければ、敢えて「遺説」を記すことはしないと記していながら、伊平屋出身とする鮫川大主の記事等の「遺老伝」を記したのは、神や貴人が北方からやってくるという観念と関わる第二尚氏の伊平屋出自の伝承(歴史)に重ねて、ふたつの尚氏の出自の地を近づけようとした蔡温の意志が働いたのではないか」と指摘する。⁽¹⁴⁾ その上で島村は、琉球の信仰や儀礼をも踏まえた広い視点から、「王権の出所や神の渡来ともいふべき方角」が、「古くから北方にあつたと観念されていた」とし、次のように論じている。

アマミキヨによる国土創成が「辺土ノ安須森」から始まつていることや、第一尚氏の出自が伊平屋島、第二尚氏の出自が伊是

名島であるといわれること、毎年五月の「稻穂祭」と正月元旦に使われる「御水」が「時之大屋子」を派遣して辺戸大川(神名「アフリ川」)から汲まれること、神歌の中に神の北からの渡来が語られている「シマワタイヌウムイ」(国頭村辺戸)があることや神送りのウタの中に北方(辺戸森・安須森)に神を送る神歌「シマノーシの唄」(渡名喜島)があることでも王権の出所や神の渡来ともいふべき方角が、島津の侵攻に関わりなく古くから北方にあつたと観念されていたことを示している。⁽¹⁵⁾

小島もまた、キミテズリが本島北方の霊山に出現すること、また御嶽が北から順に造られたことから、琉球国王の王権が北方からの力によつて支配されるという観念を指摘している。⁽¹⁶⁾

このように折口信夫以来、琉球発祥の聖地は北方にあるとし、国王もそこを出自としてやつて来るとするのがこれまでの定説であつた。為朝伝説の流布や島津氏の侵攻など、いずれも北からの影響によつて歴史が形成されてきたことは確かであろう。それゆえに常に北を志向する思考が定着したという見解も成り立つだろうが、鮫川大主伝承を詳しく検証してみると、北の出自だけでは説明できないところがある。

すでに述べたように鮫川の先祖は沖繩島島尻地方の按司に遡るのであり、父屋蔵大主が伊平屋島に渡つて行つたと語られている。ルーツを遡れば遡るほど本島王族の出身というところにまで辿り着いてしまうのである。伊是名島の百姓の出身とされてきた尚円王金丸もまた、同じようにルーツを辿つてゆくと「先王ノ後胤」だったとする説がまかり通つていた。

それでは、第一尚氏第二尚氏ともにそれぞれの発祥を何故に沖縄島に求めて語るのでしょうか。鮫川の曾祖父であった島尻大里按司は佐敷と隣り合う間切の按司であり、その曾孫鮫川が伊平屋を脱出して辿り着いた地は、父祖の地大里の隣り間切だったのである。即ち鮫川は父祖の地に戻ってきたということになる。しかも、この地を指示したのは夢のなかに現れた白髪翁だった。この白髪翁は鮫川大主の未来への先導者として、迫害や危難に遭うたびに進むべき道を指示してきた。そうして辿り着いたのが父祖の地大里に隣り合う佐敷であったのである。ここには佐敷を王権発祥の地とする物語生成の力学が大きく作動していたと考えなければならぬだろう。場天潟が南を腰当てにして北を向いた良港だという理由だけでは、長い航海を経た鮫川が辿り着く場所としての必然性は薄い。物語として語らねばならない土地とは何かというと、父祖の地以外の何物でもない。

しかしながら、物語は一族の歴史をいったん北の伊平屋に渡ったところから語ってゆく。その背景には多くの研究者が指摘するように、北方への信仰が基底にあったことは言うまでもなからう。それにしても、こうした本島にカムバックしてくるという物語を生成し語り伝えた伝承の担い手とはどのような人々であったのであろうか。

実は尚円王金丸の出身地の伊是名島には、仲田に伊是名玉御殿、諸見に尚円王金丸の御躰所や産井（ウブカー）が現存している。かつてはこのウブカーの水を首里の玉陵に供えるために、五年ごとに汲みに来たという。対して鮫川大主に関する遺跡はまったく伝えられていない。このことは伊是名島における鮫川大主の事蹟が歴史上

から消失していることを物語っている。折口信夫も「支那に対しては、佐敷尚氏の後継者らしい様子を整へて来た伊平屋尚氏も、国内においては、凡尚巴志系統の史的痕跡を絶滅させようとしてゐたことは驚くばかりである」と指摘する。⁽¹⁷⁾ここにいう「佐敷尚氏」とは第一尚氏、「伊平屋尚氏」とは第二尚氏を指している。折口の指摘は、第一尚氏と第二尚氏は別系統で、血縁的な連続性はないにもかかわらず、第一尚氏から第二尚氏への交替を、「第二首里宮廷が、如何にも平穩に譲り受けた形式を作つてゐた」とし、「極めて円滑に世代の授受が行はれたやうに見せかけたものらしい」と、「支那に対しては、すべて易姓革命の行はれたことを告げない形を採つて居た」というのである。第二尚氏が採つた国内と明国に対する態度の違いが大きな矛盾とひずみを抱えていたことは明らかであろう。最近でも、「第一尚氏を歴史上から抹殺すべく家譜の作成を拒み、命からがら地方に逃げ隠れた第一尚氏的首狩りや墓荒らしが横行していたという古老たちの言い伝えがある」と山城清勝は述べている。⁽¹⁸⁾事実、第一尚氏滅亡のさい、首里にあった天山陵墓が焼き討ちされる前に、最後の王であった尚徳の家臣が尚巴志・尚忠・尚思達の遺骨を取り出して、読谷村伊良皆の通称佐敷森に秘匿したと言われている。⁽¹⁹⁾事実、龍潭に近い現在の首里大中町に南を開口部にして築造された天山陵は、発掘調査の結果、東室の「羨道の切石積にかなり火を受けたところがある」ことが指摘されている。⁽²⁰⁾また読谷村伊良皆には尚巴志他の墓を管理するニツチュという屋号の家が現在も残っており、自宅内に尚巴志と平田之子・屋比久之子の霊を祀るウルン（御殿）が建造されている。伊波普猷も「例の「よがはり」

のいざこざに、首里の真和志にある、天山陵の発かれるを恐れ、深夜に巴志・思達・金福及び泰久の遺骨を取出して、平田の子と屋比久の子とが、西原間切末吉村の山中に隠し、それでも不安なので、更に浦添間切城間村のシリンガー原に移したが、後で金福の遺骨を除くの外は、悉く読谷山間切喜納伊良皆村に移し、その後泰久はその乳母の郷里美里間切伊波村の浜南といふ所に移した」という口碑を記している。⁽²¹⁾

にもかかわらず伝承の世界では、鮫川大主について生き生きと語り伝えられている。北への志向や神の来る方角という信仰は当然あるだろうが、それだけですまされるのかどうか。ここには第一尚氏を祖と仰ぐ一族の存在が大きく作用しながら伝承を創出してゆく力学が働いていたことは確かではなからうか。鮫川大主を始祖とする門中では、今も門中祭祀の中で伊平屋神を遥拝し、旧八月十日には伊平屋神詣をするなど、鮫川大主に対する奉祀を欠かさないのである。⁽²²⁾

このように考えてみると、自らの王統の歴史を残し伝えようという一族の意志が強烈に働いていたのではなかったか。第一尚氏の末裔たちの始祖たちへの想いは、隆盛を極める第二尚氏王統のただ中にあっても消えることはなかった。王統のルーツを辿ってゆくと最後には王権の発祥地佐敷に辿り着くという物語は、第一尚氏の末裔たちとその門中に連なる人々の始祖への想いが語らせているのである。鮫川大主の伝承は、このような人々の想いに支えられ生成されながら語り伝えられてきたと考えられるのではなからうか。

注

- (1) 伊波普猷「あまみや考——大和文化南漸の跡を辿る」(一九三六年八月一日稿。伊波普猷全集第五巻 一九七四年十二月平凡社) 三三四頁
- (2) 池宮正治「琉球の歴史叙述——『中山世鑑』から『球陽』へ」『文学』第九巻第三号 一九九八年七月 岩波書店) 六九、七二頁
- (3) 小峯和明「(遺老伝) から『遺老説伝』へ——琉球の説話と歴史叙述——」『文学』第九巻第三号 一九九八年七月 岩波書店) 二七頁
- (4) 沖縄県立芸術大学附属研究所編『鎌倉芳太郎資料集(ノート篇) 第二巻 民俗・宗教』(二〇〇六年三月 沖縄県立芸術大学附属研究所) 六四五〜六四八頁。なお本書には小字挿入により「佐銘川大ぬし由来日記」と翻刻されているが、「佐銘川大ぬし由来記」とする通称に従った。また「さめかわ」には資料によって「鮫川」と「佐銘川」の両様の表記があるが、本稿ではそれぞれの資料に従って表記する。
- (5) 鎌倉芳太郎『琉球文化の遺宝』(一九八二年十月 岩波書店) によれば、大正十三年四月から十四年八月、及び十四年九月から昭和二年九月の二度、啓明会の研究補助を受けて「琉球芸術調査事業」に従事している。
- (6) 沖縄県立芸術大学附属研究所編 前掲書(注4) 四三頁
- (7) 伊波普猷「あまみや考」(前掲注1論文) には、「佐銘川大主は、伊平屋島の豪農八蔵の大主の子」だとする内容の「佐銘川大主由来記」が引用されている。管見とは異なっているが、由来記にはいくつかの異本が存在していたことが推測される。
- (8) 国頭郡教育部会編『沖縄縣国頭郡志』(一九一九年七月。第三版 一九七七年十一月 沖縄出版会) 三二六〜三二七頁
- (9) 『伊平屋村史』(一九八一年十二月 伊平屋村史発行委員会) 三五四

(10) 伊波普猷「あまみや考」(前掲注1論文)は、「八歳の大王は島襲い

大里の産で、下島じりの大里村(南山城の所在)に移住して、間もなくほど遠からぬ与座村に居を移し、其処で不慮の災難に遭つて、北山原の辺戸村に亡命し、更に伊平屋島に渡つて、産を成したが、その子の鮫川大王は、例の米騒動で島を逃出して、国頭の宜名真に渡り……」(三七三頁)とする鮫川の子孫たちの間に伝えられている伝承を紹介している。

(11) 保坂達雄「神話の生成とシャーマニズム——日光感精型神婚譚を例にして——」(『東横学園女子短期大学紀要』第三十九号

二〇〇五年一月)一七〇—一九頁

(12) 折口信夫「琉球国王の出自——佐敷尚氏・伊平屋尚氏の関係の推測——」(昭和十二年。折口信夫全集第十八卷 一九九

七年十一月 中央公論社)五四—五五頁

(13) 小島瓔禮「辺戸御嶽——霊山のアフリ信仰——」(谷川健一編『日本の神々』第十三卷 一九八七年十一月 白水社)三一

二頁

(14) 島村幸一「琉球の説話世界——正史にみる第一尚氏をめぐる伝承的叙述の成長——」(小峯和明編『漢文文化圏の説話世界』

二〇一〇年四月 竹林舎)八三、八六頁

(15) 島村幸一「袋中のみた古琉球」(『沖繩県史 各論編3 古琉球』

二〇一〇年二月 沖繩県教育委員会)三二—九頁

(16) 小島瓔禮「前掲論文(注13) 三一—二頁

(17) 折口信夫「前掲書(注12) 五六頁

(18) 山城清勝『佐久真門中誌』(二〇〇三年五月 佐久真門中会) 七頁

(19) 當真荘平『月代の神々』(一九八五年十一月 印刷センター大永) 一六一頁

(20) 安里嗣淳・盛本勲「天山路調査の概略」(『紀要』第一号 一九八四年三月 沖繩県教育委員会文化課) 一五頁

(21) 伊波普猷「前掲論文(注1) 三七—三七二頁

(22) 山城清勝「前掲書(注18) 二八—二九頁

* 本文中に引用した『中山世鑑』・蔡温本『中山世譜』は『琉球史料叢書』(一九四〇—四一年。全五卷 一九七二年四月 東京美術)・蔡鐸本『中山世譜』は『蔡鐸本中山世譜』(一九七三年三月 沖繩県教育委員会)・『琉球国由来記』は外間守善・波照間永吉編『定本 琉球国由来記』(一九九七年四月 角川書店)に拠った。

** 本稿は二〇一〇年十一月十三日、明治大学大学院「複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム」特別講義において、「琉球国王の出自をめぐる歴史伝承と信仰」と題して講義した、その前半部分を原稿化したものである。なおこれに先立ち、六月五日、國學院大學オーブンカレッジにおいて「琉球国王の出自」と「月しろの旗」と題して講演した。